MMORPG「∞・クリティカルアーマメント」

立花 豊実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＭＭＯＲＰＧ「∞・クリティカルアーマメント」

【Ｎコード】

Ｎ４５３９Ｘ

【作者名】

立花　豊実

【あらすじ】

頑固な現実主義者であるフツルは、周りに推し切られ遂に仮想ゲームの中へと参戦することになった。ほんの少しだけ触れて、後はさっさと止めてしまおうと考えていたフツルだったのだが、ゲーム開始初端からとんでもない事に巻き込まれてしまって……。

この作品は小説サイト「小説果実」にて試し書きをしております。

1話

脳細胞のシナプスに間接的にリンクする、見た目ごてごての装置は俗称で「ルッカー」と呼ばれている。頭部をすっぽりと覆う機材の重みを感じ、手の内側にねちっこい脂汗が染み出した。

むしゃぶるいなのか、単なる怖気なのか、体が細かく震えている。

見ている彼女にバレてしまったら、なんて揶揄されるか知れない。

必死に冷静さを装いつつ「あーだ、こーだ」といちゃもんをつけ時間を稼ぎなんとか状況を打開したかったのだが、いつもの冴え渡る知識知恵の応酬スキルが今日はどこか調子悪いらしい。出る口出る口言い訳がましいことばかりで、これでは彼女の思う壺だ。

学校の友人が皆やっていたから、隣に住んでいる幼なじみが小ばかにしてくるから、妹が滅茶苦茶ハマってしまっており「お兄ちゃん時代遅れー。頭良くてもバカなんじゃないの？」とか罵ってきたから、実は父までやっていて「お前の将来が不安だよ……」とか物憂げに言い出すから、仕方なくだった。

フツルはＶＲＷＭＭＯＲＰＧ（仮想現実世界多人数同時参加型オンラインロールプレイングゲーム）になんて全く興味がない。

だが周りの環境はどうだ。時代の潮流というものが否応なしに変化し、受け入れなければ容赦なく置いて行かれる高度情報化社会のご時勢にあって、仮想に身を委ねるという次なる時代を啓示するゲームを「私はしたことがありません」というのは……そう、痛い話なのだ。

やるよ、と言ってしまったからには腹をくくらなければいけない。

別に、このいかにも頭の中を覗きますよ的な機材に体を預けることが怖いわけじゃない。そっちの世界に入ったとき、何か不都合があって痛覚だけやたら鮮明なのにモンスターに食い殺されるとか、そんなもんにびびっているわけじゃない。ましてやＰＫなんて呼ばれている弱犯罪行為に、まだ遭遇すらしていないのにイメージが髣

鼻と浮かび上がってくる、とか絶対ない。あまつさえ、
「そんな緊張してないで、さっさと始めなさいよ」
「き、緊張？　ワガハイが？　そんなワケないだろう、ハハ、ハハハ」
「……あっれえー、もしかしてフツルさあ」
幼なじみの顔がぐいと迫る。年頃の女の子らしい爽やかな香りがフツルの鼻に抜けていく。ともすればグッとくるシチュエーションになるはずだが、そのぷりりんとした果実の唇からは、甘い囁きはおろか励ましの言葉さえなかった。むしろ、まったく逆の言い草をしてのける。

――――――びびってんの？
どこか引き気味に、そしてそれすらも楽しんでいるかのように呟いたのは、わざわざ家にまで来てフツルのＶＲＭＭＯ解禁を見物しにきた、隣に住んでいる幼なじみだ。咲星（さきぼし）　唯実（ゆいみ）と言う名前で、本名をそのまま芸名にしている雑誌顔なじみのアイドルでもある。
ここで彼女との恋仲やら親友やらと素敵な関係に期待したいところなのだが、そんなポジティブな間柄ではない。どこか不釣合いで嫌味な、何だか微妙にズレのある関係。普段はあまり気にならないが、二人には何か特殊なほつれが生じていた。他方は好意を発しているのに、もう一方はどこか勘違いをしているという、実際には単なる行き違いなのだが。
「楽しみだなあ。フツルって運動神経もクソがつくほど抜群なのに、頭の回転だってすごいじゃん？　それをルッカーが認識して向こうに渡ったとき、一体どうなるのかなって。ユイミッティ、もうずっとわくわくしているのですよ、わくわく」
「クソをつけるなよ、クソを」
ユイミの言うとおり、確かにフツルは現実の中で万能だった。
リア充を邁進する稀に見る完璧主義者であり、頑固なリアリスト。何をやらせてもそつがなく、成績では今期で遂に三回目となる無欠

のオール5を達成している超のつく優等生なのだ。
　そんな彼が断固として触れようとしない分野「ＶＲＷ――ｖｉｒｔｕａｌ　ｒｅａｌｉｔｙ　ｗｏｒｌｄ」。投入された初年、ゲームプレイヤーがシステムに幽閉されたことが話題となって、近年では大流行を博している一大ゲームコンソールだ。つまり仮想空間（ヴァーチャル）なのだが、フツルはその使用を頑なに拒否し続けてきた。
　現実で「勝てない」者たちが憩いを求め、堕落し、逃避を可能とするための腐敗しきった世界、フツルのＶＲＷに対する評価はそんなものだ。現実の肉体を長く寝かしつけ、勉強やスポーツに置き換えればさぞ有益となるだろう時間を無駄に浪費してまで、実際には存在しない空想上の世界で一体何のために過ごさねばならぬのか。
　フツルにはＶＲＷの存在意義が、根底的に理解できなかったのだ。

「いいから早く被って。とっとと入っちゃってよ。まずはそれから」
　ユイミにルッカーを押し付けられ、促されるように専用のシートで横になる。
　ぐんにゃりとした透明なベッドは、体がそのまま埋もれてしまうのではと焦るほど、柔らかかった。耳の上まで沈むと、外界の音が閉ざされて水の中にいるみたいだ。
　目をつむり、呼吸を落ち着かせてから数分。ほとんど寝入りそうになったところで人の声が、遠くの方でかすかに発せられた。年齢は結構いっていそうな少しキツめの女性の声だ。それは徐々に明瞭さを帯びて、間もなく耳元でささやかれるほど近くなった。最初は英語、次に中国語、そして日本語と続けざまに言語確認をとられ、そこから以後の使用言語が固定される。
　それから体勢が云々、健康状態が云々、システム状況が云々だの、取り扱い説明書に同封されていた同意書の文面とは別に、口頭での注意事項をちんたらと解説される。
　各項目で返答を要され、
『はい』『問題ありません』『異常ないです』

などをしばらく連呼する時間が続いた。

2話

一通りのチェックが済むと、一体どんな処理を施しているのか、ほったらかしにされてしまった。無視覚で無聴覚、その他全ての五感を完全に塞がれた常闇の真っ只中に取り残される。

ただでさえヴァーチャルゲーム初参戦のフツルにとっては、不安を助長するばかりの見事な放置プレイだった。

（……本当に大丈夫なんだろうか？）

背中に嫌な悪寒を感じ、声でも出してみようかなと思ったときだ。

突然、水の中に落とされた。

水面を叩くざぶんっ！　とした音と共に、背面を叩かれて勢いよく着水する。体表面を冷たい液体の感触に見舞われ、とっさに両手両足に力が入った。当たり前のように、水をかく条件反射が生じるのだが、

――――スカスカッ！

水の中にいる感覚は確かにあるのに、触れようとするものはまるで空気（エアー）のような、斬新なシチュに落とし込まれてしまった。初心者にはこれが生命に危機をもたらす重大なエラーなのか、それとも仮想の入り口としては当たり前のデフォなのか、まるで判別のしにくい極めてアンビリボー！　な展開だ。

「ぶべぇ（ええ）！？　ぶあんっぇ（なんで）？？」

いや、いやいや。

これは想像していたよりもはるかに厳しい世界のようだ。

ちょっと、本当にいくらなんでも苦しすぎる。

ユイミから事前に聞き出しておいた話では、仮想の中での痛みは「かゆみ」程度のものだと聞いていた。施行された当初は多くの試験者やゲームのベータテスターなどからデータを蓄積させ、肌の感覚の強度を誰もが不快なく楽しめるように平均化して調整させたそ

うなのだ。
　水の中というシチュエーションが仮想ではどんな位置付けとなっているのか知りもしないが、早く次の展開がこなければヤバイのではないだろうか。
　フツルがいかに肉体的に有能であっても、酸素ボンベなしで水中に野放しにされたら五分ともたない。そもそも脳内の世界で、現実の肉体的要素が加味されているとは考えにくいのだが。
（こ、呼吸、酸素がやばい！　……いや待て待て、落ち着け、あくまで仮想！　ここは仮想だ！　酸素はタップリある、理性を失うな！）
　しかし本当に苦しい。体外のモノを吸い込むと、口腔がごぼごぼと言うだけで肺がまったく満たされない。
　もはや拷問のような状況に、フツルはこれを【エラー】だと認識した。
　といっても対処法がさっぱり分からない。
　ボタンか、ボタンがどこかにあるのか？
　身をよじって、後ろを向いても横を向いても声を出してみても、全て水の泡となって吸い込まれてしまう。どこかに何かないかと見向いてみるも、左右に上下、どっちがどっちなのか方向の感覚すらも絶無である世界は、ただ遠く青い光に包まれているだけで何もなかった。どうして魚類が見受けられないのかと疑問が湧いてくるほど、途方もなくキレイな海の中だった。
　そのうち頭がぼーっとし出して視界も薄くなり始め、のたうつ体から徐々に力が抜かれていく。五感が奪われ、意識すら海溝のそこに沈み込むように、フツルは奈落の底へと落ちていった。

☆☆☆

　身を刺すような冷気を感じ、次に目が覚めたとき、フツルの体は地面の上にあった。

「……ううっ」
冷気が体を覆い、ぶるぶると身体が震える。
肌に感じる重力をたどるように、ゆっくりと体を起こした。手に触れた床がツルツルとした黒いタイルで、やたら冷たい。
「……ここどこだ。もしかしてワガハイ、死んだのか？」
状況を把握しようと周囲に目を向ければ、そこはプラネタリウムのような閉塞的空間で、どこかで見たことがありそうな【闘技場】のようだった。
まどろみかける思考を冷ますために、ふるふると頭を振ったとき。視界の隅、フツルからは反対側となる闘技場の端に、小柄な少女の姿を発見した。いかにもファンタジックなゲームに登場していそうな武具を身にまとい、銀髪ショートの髪、色のついた瞳は金色で、はたはたと揺れる服の裾からはカッコの決めつけられた【剣】が携えられていた。
やっとまともなゲームの世界へ来れたのかと、フツルは思わず歓喜した。ともすれば、泣きだしてしまいそうなほどだ。
「あ、あの！　今日初めてゲームに参加し……って、ちょ、ええ！？」
ゆるりと体位を変えた少女が、腰巻に下げられた鞘から剣を抜き去り、全力の疾走でこっちへと向かってきた。どう見ても話し合いをしようという雰囲気ではなく、闘う気満々の臨戦態勢に見える。
「ちょっと待って！　来たばかりでまだ何がなんだか、ってうおおおおお！」
――ーヴンッ！　シュヒン！
二連撃で振り払われた刃が、かろうじて避けたフツルの眼前と横腹をかすめた。当たればただでは済まされないだろうその行為を、彼女はそこで終わりにするつもりはないらしかった。くるり、と華麗に一回転をすると、そのまま次なる連撃に向けて予備動作に入る。
フツルの思考はいよいよサッパリ覚めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4539x/

MMORPG「∞・クリティカルアーマメント」

2011年10月21日03時23分発行